

■（１１７）新聞記者の「専門家気取り」はNG！

「３．１１」は卒業式シーズンの金曜日だった。その週末に式を予定していた学校も多く、紅白の幕が張られたまま避難所となった体育館もあった。あれから丸２年……。中学校や高校ならば、今年の卒業式で、当時のすべての在校生が巣立つことになる。

卒業生にどんな言葉を贈るか。校長や送辞を読む在校生は登壇の瞬間まで悩むだろう。記者で言えば、輪転機が回る（＝新聞の印刷が始まる）瞬間まで、原稿を何度も見直すような心境だ。

そんな記者でも陥ってしまう過ちが、専門用語と漢字の熟語の多用だ。専門的な取材を深めていけばいくほど、ついつい専門用語や難解な言葉を使ってしまう。デスクらは平易な表現に直すように心がけているものの、すり抜けてしまうこともある。朝日新聞も最近、中学校の先生から「漢字が多いと生徒がついてこない」と指摘されたという。取材現場では今、難しい漢字にルビをふったり、話し言葉に近い柔らかい表現を使ったりなどの改善を試みている。

マスコミ業界の言い回しが流行った時代がある。「コーヒー」を「ヒーコー」のように逆に言い、誰もが業界人気取りだった。同じ業界でも、記者の「専門家気取り」はNG！（山）